



Title	日本における褒姒の変身譚の受容と変容について
Author(s)	王, 貝
Citation	大阪大学言語文化学. 2014, 23, p. 45-58
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77758">https://hdl.handle.net/11094/77758</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日本における褒姒の変身譚の受容と変容について\*

王 貝\*\*

キーワード：褒姒の変身譚、日中比較、変容

褒姒是中国西周时代的最后一个国王周幽王的王后。她虽然是历史上真实存在的人物，但围绕她却有许多不可思议的故事。

在中国，褒姒是龙的沫（涎，龙的精气）变成的玄鼈（蜥蜴或说玃）所变化的。相关的故事最早可见于春秋时代的《国语》，并且在之后的文献中，这种变身的说法被延续了下来。然而在日本，一般认为褒姒是狐狸变化而成的。《平家物语》和《下学集》中有相关记述。通过以上的比较可以看出，中日两国文献中，关于褒姒变身的说法存在着不同。日本关于褒姒的故事是中国传来的，但她为狐狸所变，以及死后转生成为玉藻前的变身譚是在日本形成的。

本论文中，在分别对中日两国褒姒变身的故事进行考察的基础之上，将当时的文化背景等纳入视野范围，对褒姒的狐狸的变身譚的形成进行分析。

与褒姒相关的研究，在中国主要围绕《诗经》中记叙的“赫赫宗周，褒姒灭之”为中心展开，专注于“女色亡国”这种文学表现与封建时代女性观之间的相互关系的研究比较多。在日本，虽然存在着关于玉藻前和妲己的研究中提到褒姒这种情况，专注于褒姒的故事的研究却很少。而且，中日两国目前都没有发现针对褒姒变身譚进行考察的研究，也没有发现提及两国褒姒变身譚有所不同的研究。

本文的结论主要有以下几点：一、褒姒的龙、蜥蜴的变身譚在中国很早时期就已定型，那以后被传承下来也没有发生变化。文献性质的制约，以及《史记》等权威性文献巨大的影响力，是造成此种现象的原因。

二、日本没有接受褒姒的龙、蜥蜴的变身譚，而是创造了褒姒的狐狸的变身譚。深入追究这种变身譚被创作出的原因的话，主要有以下三种推测：一、十三世纪的日本的文化背景下，狐狸的变身譚比起龙、蜥蜴的变身譚更容易被接受。二、存在妲己亡国后变成狐狸逃走的故事被流用到褒姒身上的可能性。三、中国唐代的文学作品中有把亡国的美女类比为狐狸的倾向，《平家物语》的作者有可能吸收了这种题材。

---

\* 褒姒的变身譚在日本的接受和变化情况（王貝 WANG Bei）

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

## 1 はじめに

褒姒（ほうじ）は中国の西周期の最後の王となる幽王（ゆうおう）の後である。この人物は、歴史上実在の人物ではあるが、彼女をめぐる不思議な物語が多数存在しているため、褒姒は日中両国において王を虜にした魔性の美女で、化け物として認識されることが多い。

中国において、褒姒は狐の化け物ではなく、龍の瘖（涎、龍の精気）が化した玄龍（トカゲ、または蛇）の化け物とされている。このような話が見られる最古の文献は春秋時代の『国語』の「鄭語」である。その後の文献においても、この変身譚が変わりなく伝承されてきた。

一方、日本において、褒姒は狐の化け物とされることは一般的である。褒姒に言及する最初の文献である『平家物語』巻2「烽火の事」には、周が滅亡された後に褒姒が夜干<sup>1</sup>に化け、逃げ去ったという記述がある。また、『下学集』の「犬追物」には、昔の西域の斑足王の夫人が褒姒に転生し、死後に日本の玉藻前として現れ、最後に白狐になって逃げ去ったという記述もある。

以上をふまえて、日中両国の古典文献における褒姒の変身譚が異なっていることがわかる。褒姒は中国の歴史上の人物であるため、日本の褒姒に関する話も中国から伝来したものであると考えられる。その中で、烽火の話、王を虜にした話などは中国の褒姒の話がそのまま受容されたと思われるが、狐の化け物、および死後に玉藻前への転生などの変身譚は日本で創作されたものであり、もとの褒姒の話の変容であると思われる。

本研究では、両国における褒姒変身に関する話をそれぞれ史的に考察する上で、当時の文化背景などを視野に取り入れ、褒姒の狐の変身譚の形成について分析していきたい。

## 2 先行研究

中国においては、「女色が国を滅ぼす」という文学表現と封建時代の女性に対する考え方の相互関係に注目する先行研究が数多くなされていた。その中で、褒姒の話を研究テーマにするものがなかったが、褒姒に言及した研究は、主に『詩経』の「正月」に記述された「赫赫宗周、褒姒威之」（輝かしい周王朝、褒姒がそれを亡ぼす）を褒姒の話の出発点とするものが多い。楊、許（2008）は、「赫赫宗周、褒姒威之」を最初の手がかりとして「女色が国を滅ぼす」という故人の教訓について論じた。さらに古代の詩人と政治家はこの教訓に対する理解が異なることを議論した。馮（2009）は、『訓語』成立当時の男権的な封建社会において、周を滅ぼす罪を褒姒に着せるために、褒姒の妖異譚

<sup>1</sup>「野干」と書かれた場合もある。『日本文学全書』第二十編『平家物語』p.33に、夜干について、「夜干とは狐のことなり」という注がある。

(龍、トカゲの変身譚)を作り出したと主張している。

日本において、褒姒を中心とする先行研究はないが、玉藻前や妲己に関する研究の中で褒姒に言及したものがある。例えば、堀(1988)は、玉藻前の三国伝来説を提示する際に、「その内容は、ともに九尾金毛白面の狐の化現である殷の妲己、天竺の華陽夫人、周の褒姒、そしてわが国の玉藻の前の説話を縦に連続した物語であり…」というように褒姒の変身譚に言及した。ところが、このような研究は玉藻前や妲己の話を中心として論述したため、日本における褒姒の狐の変身譚への言及はあるが、いずれも触れられる程度に留まり、変身譚の考察までは踏み込まなかった。

日中両国において、上述のような褒姒を「女色が国を滅ぼす」の代表とする研究や、玉藻前か妲己の変身譚で褒姒に言及する研究があるが、褒姒の変身譚を中心とした研究はない。さらに、両国における褒姒の変身譚の相違点に触れる研究は管見では見当たらない。

### 3 中国における褒姒の変身譚

#### 3. 1 中国における褒姒の変身譚および考察

褒姒に関する記述を調査する際、中国の古典文献を幅広く取り上げるために、CCL<sup>2</sup>、漢籍電子文献資料庫<sup>3</sup>、古代漢語語料庫<sup>4</sup>という3つのデータベースを利用した。検索結果として、褒姒に言及する計81部の文献は、歴史書のみならず、類書、小説などのジャンルにまたがる。その中で周の国を亡ぼす悪女<sup>5</sup>の記述、烽火の話<sup>6</sup>などが大多数を占め、褒姒の変身譚についての記述は81部のうち13部の文献しか見られなかった。表1において、上述の13部の文献を年代順に配列し、その中の褒姒に関する記述を示す。なお、本論文の論述に影響しない前提の下で、具体的な記述を部分的に省略する場合がある。

<sup>2</sup> 北京大学中国語言研究中心(CCL) 古典漢語語料庫、更新日 2009-07-20。

<sup>3</sup> 台湾中央研究院・歴史語言研究所 漢籍電子文献資料庫、更新年 2011。

<sup>4</sup> 語料庫在線古代漢語語料庫、利用日 2013-5-10。

<sup>5</sup> 例えば『詩経』「正月」にある「赫赫宗周 褒姒滅之」という記述。

<sup>6</sup> 例えば『古列女伝』「周幽褒姒」にある「幽王為燧燧 大鼓有寇至 則舉諸侯悉至而無寇 褒姒乃大笑」という記述。

表1 褒姒の変身譚のある文献および変身譚の具体的な記述<sup>7</sup> (年代順)

文献 (年代)	原文
『国語』「鄭語」 (紀元前 479 年～紀元前 451 年)	『訓語』有之曰：夏之衰也，褒 <sup>8</sup> 人之神化為二龍，以同于王庭，而言曰：余褒之二君也。夏后卜殺之與去之與止之，莫吉。卜請其禱而藏之，吉。乃布幣焉而策告之， <u>龍亡而禱在，積而藏之，傳郊之。</u> 及殷、周，莫之發也。及厲王之末，發而觀之，禱流于庭，不可除也。王使婦人不幃而譟之， <u>化為玄黿以入于王府。府之童妾未既配而遭之，既笄而孕，當宣王而生。不夫而育，故懼而棄之。</u> 為弧服者方戮在路，夫婦哀其夜號也，而取之以逸逃於褒。褒人褒姒有獄，而以為大于王。王遂置之，而嬖是女也。使至於為后，而生伯服…
『史記』「周本紀」 (紀元前 91 年)	昔自夏后氏之衰也，有二神龍止於夏庭而言曰：余，褒之二君。夏帝卜殺之與去之與止之，莫吉。卜請其禱而藏之，乃吉。於是布幣而策告之， <u>龍亡而禱在，積而去之。</u> 夏亡，傳此器殷。殷亡，又傳此器周。比三代，莫敢發之。至厲王之末，發而觀之，禱流于庭，不可除。厲王使婦人裸而譟之， <u>禱化為玄黿，以入王後宮。後宮之童妾既配而遭之，既笄而孕，無夫而生子，懼而棄之。</u> (中略)聞其夜啼，哀而收之，夫婦遂亡，葬於褒。褒人有罪，請入童妾所棄女子者於王以贖罪。棄女子出於褒，是為褒姒。
『古列女伝』「孽嬖・周幽褒姒」 (紀元前 77 年～紀元前 6 年) <sup>9</sup>	褒姒者，童妾之女，周幽王之后也。初夏之衰也，褒人之神化為二龍，伺于王庭，而言曰：余，褒之二君也。夏后卜殺之與去，莫吉。卜請其禱藏之而吉。乃布幣焉。 <u>龍忽不見。而藏禱積中。</u> 乃置之郊。至周莫之敢發也。及周厲王之末，發而觀之，禱流于庭，不可除也。王使婦人裸而譟之， <u>化為玄黿入于後宮。後宮之童妾未配而遭之，既笄而孕，當宣王之時產。無夫而乳，懼而棄之。</u> (中略)夫妻夜逃，聞童妾遭棄而夜號，哀而取之，遂竄于褒。長而美好。褒人姒有獄，獻之以贖。幽王受而嬖之。遂釋褒姒。故號曰褒姒。

<sup>7</sup> 褒姒の変身譚に関連する部分を太字・下線により明記した。<sup>8</sup> 「褒」は「褒」の繁体字である。ここでは原文に従う。<sup>9</sup> 成立年代に定説がない場合、作者の生没年を参照にする。

『漢書』「五行志下之上」 (80年)		(省略)
『論衡』 (86年)	「奇怪」	(省略)
	「異虛」	夏將衰也， <u>二龍戰於庭，吐螫而去。夏王櫛而藏之。</u> (中略)至幽王之時， <u>發而視之。螫流于庭，化為玄龜，走入後宮，與婦人交，遂生褒姒。</u>
	「講瑞」	<u>褒姒玄龜之子，二龍螫也。</u>
『金樓子』「箴戒」 (508年～554年)		其先夏后氏衰，有二龍止於夏庭曰，余，褒之二君也。帝殺而埋其螫，三代莫敢視。厲王發而觀之，使婦人裸而諫之。 <u>螫化為元龜，後宮未甦者遭之，既甦而孕褒姒矣。</u>
『毛詩正義』「白華」 (642年)		昔夏之衰，有二龍之妖。卜藏其螫。周厲王發而觀之， <u>化為玄龜。童女遇之，當宣王時而生女。懼而棄之。</u> 後褒人有○，獻而入之幽王。幽王嬖之。是謂褒姒。 「鄭語」曰(中略)『訓語』有之曰：(省略)
『太平御覽』 (983年)	「皇親部·幽王褒后」	『國語』曰夏之衰也，(省略)
	「人·孕」	『史記』曰(中略)又曰：昔夏氏之將衰也，有二龍止於夏庭。 <u>龍亡螫在，櫛而藏之。至周厲王，發而觀之。螫化為玄龜，入王後宮。宮妾未甦而遭之，既甦而孕，無夫而生子，懼而棄之。即褒姒也。</u>
『嘉祐集』「雜論·譽妃論」 (1064年)		夏之衰， <u>二龍戲於庭，藏其螫，至周而發之，化為龜，以生褒姒，以滅周。</u>
『資治通鑒』(漢紀二十七)「孝哀皇帝下」 (1084年)		閔遂上書諫曰：(中略)昔褒神虬， <u>變化為人，實生褒姒，亂周國。</u>
『新列國志』「第一回」 (1574年～1646年)		…夏桀王末年，褒城有神人化為二龍，降于王庭，口流涎沫，忽作人言(中略)桀王命太史再占，得大吉之兆(中略) <u>所藏涎沫…化成小小玄龜一個(中略)那時婢子年才一十二歲，偶踐龜跡，心中如有所感，從此肚腹漸大，如懷孕一般。(中略)夜來腹中作痛，忽生一女。…棄之溝渠。</u>
『東周列國志』「第一回」 (1736年～1795年)		(省略)
『全漢文』「王閔」 (1762年～1842年)		昔褒神虬， <u>變化為人，實生褒姒，亂周國。</u>

現在確定できたところでは、褒姒の変身譚が見られる最古の文献は『国語』である。『国語』の「『訓語』有之曰…」から、褒姒の変身譚の最古の記述は『訓語』に遡られると思われるが、『訓語』に該当するものとされている『逸周書』<sup>10</sup>では褒姒の変身譚の記述がないということが調査により明らかになった。『逸周書』は散逸した部分が多く、褒姒の変身譚の部分が散逸した可能性もあるため、本論文では『訓語』を議論の対象としない。

また、『国語』には、褒姒という名に一致するものはないが、褒の国からやって来て、周の王に寵愛され、后となって伯服を生んだことから、褒姒であることが確定できる。

『国語』の中の褒姒の変身の話のあらすじは以下のようである。「夏が衰えたところ、褒人の祖先が2頭の龍に変化し、王庭にとどまっていた。夏后が龍の瘖を請うけうけてしまっておくことを卜ってみると、吉であったため、龍の瘖を匱に置いてしまっていた。夏殷周3代のあいだ、あえて開くものがなかったのだが、厲王の末年にいたって、ひらいて観ると、沫は宮庭に流れだして取り除くことができなかった。厲王は、婦人たちを全裸にして、これに向かって大さわざさせた。すると、沫は玄龍に化して王の後宮に入り込んだ。後宮の一人の童妾がこれにであった。そして、笄をさす年ごろ（15歳）になって孕み、宣王の時に子を生んだ。夫がないのに子を生んだので、不詳をおそれて棄てた。ある夫婦が棄てられた子を拾い上げ、褒の国まで逃亡した。その後、褒の君が周室に対して罪をおかしたので、あの童妾がすてた女子を王にさしだして罪をあがないたいと請うた。幽王が彼女を寵愛し、彼女が后になって伯服を生んだ」<sup>11</sup>

『国語』の後の『史記』、『古列女伝』および『漢書』には、『国語』と異なる表現がいくつ也存在するが、話の流れはまったく同じように見える。つまり、この4つの文献にある褒姒の変身の話の流れは時間的に以下の4つの部分に分けられる。(1) 夏の末ごろに、夏の帝王が2匹の神龍の瘖（龍の精気）を匱に置いてしまっていた。(2) 周の厲王の末年、瘖は玄龍<sup>12</sup>に化して王の後宮にはいりこみ、後宮の一人の童妾がこれにであって、笄をさす年ごろ（15歳）になって孕んだ。(3) 宣王の時代に、童妾は夫がないのに子を生んで、不詳をおそれて棄てた。ある夫婦が棄てられた子をひろいあげ、褒の国まで逃亡した。(4) 褒の君が周室に対して罪をおかした後、棄てられた子が周の王に捧げられた。

上述の4つの文献に記述された褒姒の変身譚は、もっとも早いものである。その後の

<sup>10</sup> 韋昭注『国語』では、『訓語』の注として、「訓語、周書」とされる。『周書』は現在の『逸周書』を指すと考えられる。

<sup>11</sup> 野口定男訳『史記（上）』p.47を参考した。

<sup>12</sup> 『古列女伝』では「玄龍」ではなく、「玄虺」とされるが、韋昭注『国語』では、「龍」の注として、「龍、或為虺、〇、蜥蜴也」とされるので、両者は同じものである。

文献には枝葉末節を変えたことがいくつかあるが、いずれもこの話の本筋を受け継いでいる。

『論衡』には、2匹の神龍が王廷で戦ったと記している。また、蔡が玄龍に化した時代について、上記の「厲王の時代」と異なり、それは幽王の時代であるとされる。『金樓子』には、龍が自ら姿を消したのではなく、夏の王が龍を殺して蔡を埋めたという記述があり、前代の文献とは異なる。『嘉祐集』には、二龍が王庭にとどまったのではなく、あそこで遊んだとされる。また、龍の蔡が「玄龍」ではなく、「龍」に化したと記されている。『資治通鑑』および『全漢文』における記述は、この話の要旨を簡潔に述べたように見える。また、褒姒に化したのは「虺」とされる。『新列国志』および『東周列国志』はこの話に潤色を加え、歴史小説らしく見えるように工夫した。

これらの文献における記述を考察した結果、中国の古典文献における褒姒の変身譚の本筋は非常に早い時期にある程度定着し、表現の異なる部分、または潤色を加える部分、省略する部分が存在するにも関わらず、褒姒は龍の蔡が化した龍の変身したものであることがわかる。この変身は、龍が人間を妊娠させる方法によって実現されたと記されている。

### 3. 2 褒姒の変身譚が変化なく伝承され続けてきた理由

3.1 節で述べたように、中国において、褒姒の龍・トカゲの変身譚の本筋は長年にわたって変化無く伝承され続けてきた。その理由として、次の2点が考えられる。

①中国の文献の性質に制約されたこと。中国において、歴史書・思想書に記されたものは物語的な要素の有無にかかわらず、史実として扱われたため、その後の文献にそのまま引用された場合が多い。例えば、表1に示したように、『論衡』や『資治通鑑』などの歴史書・思想書は、褒姒の変身譚に関する話は、それらの文献より遥かに古い歴史書『国語』や『史記』とほとんど同じである。これは、歴史書・思想書である『論衡』や『資治通鑑』の内容の一部は、より古い歴史書から引き継がれたからだと考えられる。

②『国語』・『史記』・『漢書』は中国史上非常に重要な文献として、後世の歴史学のみならず、文学にも深遠な影響を与えている。表1に挙げた原文からも、後世の文献に褒姒の話の典拠がしばしば見られる。例えば、『毛詩正義』には「『鄭語』曰」、『太平御覧』には「『史記』曰」と記してある。このように、『国語』・『史記』と『漢書』にある褒姒の龍やトカゲに関する変身譚は中国において定着した知識として共有されていたことが推測できる。

#### 4 日本における褒姒の変身譚

筆者は大系本文データベース<sup>13</sup>、東京大学データベース<sup>14</sup>を利用し、日本古典文献における褒姒の変身譚を表2に整理した。

表2 日本古典文献における褒姒の変身譚（年代順）

文献	時代	対応する中国の時代	変身譚の内容	人物
平家物語	1240	南宋後期	周の褒姒が狐に化ける	周幽王の後褒姒
唐鏡	1261～1298	南宋後期～元	夏の末喜、殷の妲己、周の褒姒は狐の化物	夏の末喜、殷の妲己、周の褒姒
神明鏡	14世紀後半	元末期～明初期	斑足太子の塚の神、褒姒、玉藻前は狐の化物	斑足太子の塚の神→周幽王の後褒姒→玉藻前
下学集	1444	明前期	斑足太子の夫人、褒姒、玉藻前は狐の化物	斑足太子の夫人→周幽王の後褒姒→玉藻前
玉藻前物語	1470	明前期	斑足太子の塚の神、褒姒、玉藻前は狐の化物	斑足太子の塚の神→周幽王の後褒姒→玉藻前
殺生石（能）	室町時代	明前期	斑足太子の塚の神、褒姒、玉藻前は狐の化物	斑足太子の塚の神→周幽王の後褒姒→玉藻前
臥雲日件録	15世紀	明前期	褒姒、玉藻前は狐の化物	周の褒姒→玉藻前
絵本三国妖婦伝	1803	清中期	妲己、斑足太子の夫人、褒姒、玉藻前は狐の化物	殷の紂王后妲己→斑足太子の華陽夫人→周の幽王の後褒姒→玉藻前

中国における褒姒に関する話の中で、狐の化物というような変身譚は存在しないため、論文の冒頭部分に提示した『平家物語』および『下学集』にある褒姒を狐と結び付ける話は日本で形成されたものではないかと推測できる。

褒姒を狐と結び付ける最初の文献であるかどうかは確定しにくいものの、『平家物語』巻2に、褒姒を狐とする説が現れた。『平家物語』の成立年代は1240年とされており、『資治通鑑』が著された1084年よりも百年あまり遅く、中国の宋の末期にあたる。その中の褒姒に関連する具体的な記述は以下である。

「周の幽王、褒姒と云へる最愛の后を持給へり。天下第一の美人なり。（中略）其時都傾て、幽王終に亡にけり。さてかの后は野干と成て走失けるぞ怖き。」

この部分には、褒姒が野干（狐の異名）に化け、逃げ去った話が記述されている。この話は、動物に変身していた人間が旧態に回復する話であろうと思われる。周作人氏に

<sup>13</sup> 国文学研究資料館大系本文（日本古典文学・断本）データベース、利用日 2013-6-30。

<sup>14</sup> 東京大学史料編纂所、利用日 2013-6-30。

よる『平家物語』の中国語翻訳版には、「野干」の注釈として、「野干即是狐狸的異名，佛經中常用這個名稱。中國傳說妲己乃九尾野狐所化，這裡卻說這是褒姒。<sup>15</sup>（野干は狐の異名であり、仏經の中でこの名称が常用される。中国の伝説では妲己は九尾の野狐の化身とされるが、ここではかえってそれは褒姒であると言う）」とされる。このことから、周作人氏も褒姒を狐とする説が中国の伝説と異なることを意識したものと考えられる。

「褒姒が狐に変身する」という話が最初に出てくる『平家物語』においては、褒姒の話以外に、狐の変身譚が存在しない。『唐鏡』においてはじめて褒姒が末嬉、妲己と並べられるようになり、そして三人の正体とも狐とされた。『神明鏡』『下学集』などの文献に見られるように、14世紀後半から、褒姒が玉藻前と結び付けられ、三国伝来の妖狐とされた。ただし、日本における褒姒の話の中の狐以外の要素、例えば、傾国の美女や「褒姒」という名前、周幽王の寵妃などの要素は中国における褒姒の話の要素をそのまま受容したと考えられる。

## 5 日本における褒姒の変身譚の受容と変容

3.2で述べたように、歴史書、思想書などは文献の性質による制約のため、中国においては、褒姒の龍、トカゲの変身譚が変化なく伝承され続けてきた。このような状況に対し、日本の場合、褒姒が初めて登場した『平家物語』は、その性質が物語（中に褒姒の話は昔話として登場する）であるため、文献性質による制約が軽減され、より自由にひねりを加えることができた。ゆえに、龍、トカゲの変身譚から他の変身譚への変容も可能となった。では、なぜ鳥や他の動物ではなく、狐を変身後の形態として選んだのだろうか。本章において、どのような要因が日本における褒姒の狐の変身譚の誕生を促したかについて検討してみたい。

日本の褒姒の狐の変身譚の形成要因として、次の3点が挙げられる。(1) 13世紀の日本の文化背景のもとで、龍、トカゲが女性に変身する変身譚より、狐の変身譚が受け入れられやすかった。(2) 妲己の狐の変身譚が日本で褒姒に流用されたこと。(3) 日本の文学が中国唐の文学の「美女は狐」というモチーフを引き受けたこと。

### 5.1 日本の文化背景と変身譚の受け入れ

人と動物とのあいだの変身譚の土台は、古代における人間の動物信仰にあるとされる<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> 周作人 (2001)、p.130。

<sup>16</sup> 中村 (1984)、p.272 は、「動物から人への変身説話は、古代における動物神と人との神婚伝承からはじまる。あるいはこれに、人の姿をかりに動物神の託宣・告知の伝承も加えるべきかもしれない」と述べている。

日本では、『古事記』（712年）、『日本書紀』（720年）、『風土記』（8世紀前半）の成立した奈良時代において、変身譚の主流は爬虫類（ヘビ・ワニ・タツ）の変身譚である<sup>17</sup>のに対し、狐の変身譚が存在しない。これは、当時の中央文化におけるヘビ信仰に関わっていると考えられる。ただし、この時期ヘビ信仰はすでに最盛期が過ぎてしまい、嫌悪されはじめた。

平安時代に入ると、『日本霊異記』（820年）において、狐が女性に変化し、人間と通婚する話が初めて現れた。狐の変身譚が大陸伝来のもののみならず、その土台となる狐信仰も渡来したものだと考えられる。しかし、この時点で狐信仰は特定の氏族をめぐる伝承であり、ヘビ信仰にはまだ匹敵できないため、当時の日本では広く受け入れられなかった。

その後まもなく、狐信仰を持つ渡来族秦氏の勢力の拡張および唐から帰朝した空海の活動によって、狐信仰が広がり、衰弱しつつあるヘビ信仰がそれに制圧されるようになった。このような変化は、その後の日本における狐の変身譚の受容の文化的基盤となった。さらにこの時期、仏教の普及に伴い、中国から伝来した狐の変身譚も流布しはじめた。

12世紀に入ると、『今昔物語集』（1110年ごろ）において、ヘビ以外の爬虫類の変身譚がなく、しかもヘビより狐が人に変身する例数が多い。また、『今昔物語集』における狐は概ね女性に変身する<sup>18</sup>ことも興味深い。中村（1984）も、ヘビが男性の象徴になりやすいと述べている<sup>19</sup>。

一方、中国においても、狐と女性の関係が深い。中塚（1999）は、「…『搜神記』巻18「山魅阿紫」では（中略）正体と変化後の順序が逆になっているが狐と女性の関係が深い、ということは十分に証明できよう。後には狐は必ず女性に化けるとい説も出てくる。」<sup>20</sup>と指摘している。中国の影響を強く受けた日本の狐の変身譚も、このような傾向が生じることも想像できるだろう。しかも、そもそも褒姒は中国史上の妖異漂う人物であるため、中国伝来の狐の変身譚に統合することも十分にありうる。

上述のように、狐と女性のあいだの変身譚は、(1)日本における狐信仰の普及(2)爬虫類(ヘビ)信仰の衰弱(3)伝来した中国の狐の変身譚の影響という3つの要因をもって、龍、トカゲなどより受け入れられやすかったのではないかと考える。『平家物語』の作者がこのような事情を配慮して「龍・トカゲ」を「狐」と変えた可能性は、肯定も否定もできない。ただし、受け入れやすかったからこそ、褒姒の狐の変身譚がその後さらに広げられ、玉藻前の話と結びつけられることができたと考えてよからう。

<sup>17</sup> 中村（1984）、p.25 表1-1、表1-2を参照した。

<sup>18</sup> 中村（1984）、p.116を参照した。

<sup>19</sup> 中村（1984）、p.160。

<sup>20</sup> 中塚（1999）、p.74。

## 5.2 妲己の狐の変身譚の流用

褒姒の狐の変身譚が中国の妲己の話に大きく影響されたと思われる理由は、その独特のパターンに注目したからである。『日本霊異記』にある狐と人間の婚姻譚のように、日本では狐が女性に変身して人間の男性と結婚する話が数多く存在する。ところが、褒姒の話はただ「女性に変化する」ではなく、「傾国の美女で国を滅ぼす力を持つ」というような独特のパターンにあたる。そして、褒姒の婚姻相手は一般の人間の男性ではなく、国の王である。この独特のパターンは日本における従来の狐の変身譚とは異なり、もともと中国における妲己の話のパターンであると考えられる。

妲己は殷の時代の最後の王である紂王の寵妃で、王を虜にして、国を破滅に導く魔性の女である。殷の国が破滅した後に妲己が狐に変身して逃げ去ったという変身譚は中国の南北朝時代にすでに現れ、日本に輸入されたのもかなり早く、平安後期の大江山房氏の『狐媚記』では、「殷之妲己為九尾狐…（殷の妲己は九尾の狐と為り…）」とされる。ゆえに、時間上、『平家物語』の作者が妲己の話を知り、その中の狐の変身譚を褒姒に流用した可能性が十分あると思われる。さらにつっこんで考えると、妲己の身分およびもたらした災いなどはある程度褒姒と似ていると思われるので、彼女の話をも褒姒に流用することも都合のいいことと言えよう。

## 5.3 中国唐の文学の影響

中国の古典文献において、災いをもたらす寵妃として、褒姒を妲己と並列することが多い。例えば、『史記』「外戚世家第十九」に、「殷之興也以有妲。紂之殺也嬖妲己。周之興也以姜原，及大任。而幽王之禽也淫於褒姒。（殷の興起は有妲氏が故である。紂が殺されたのは妲己を寵愛したためである。周の興起は姜原と任が故である。幽王が捕まえられたのは褒姒の色に溺れたためである）」という記述がある。唐の白居易の『白氏文集』に、ただ褒姒を妲己と並列しただけでなく、さらに、両者を狐に類比する内容が「古冢狐」という詩に見られる。

古冢狐 妖且老（古塚の狐 妖にして且つ老ゆ）

化為婦人顔色好（化して婦人と為り 顔色 好し）

（中略）

忽然一笑千萬態（忽然 一笑 千万態）

見者十人八九迷（見る者 十人に八九は迷ふ）

假色迷人猶若是（仮色 人を迷はす 猶是の若し）

真色迷人應過此（真色 人を迷はす 応に此に過ぐるなるべし）

（中略）

狐仮女妖害猶浅（狐 女妖を仮るは 害 猶浅し）

一朝一夕迷人眼（一朝一夕 人の眼を迷はす）

女為狐媚害即深（女 狐媚を為すは 害 即ち深し）

日増月長溺人心（日に増し月に長じて人心を溺れしむ）

何況褒姒之色善蠱惑（何ぞ況や褒姒之色 善く蠱惑す）

能喪人家覆人国（能く人家を喪はしして 人の国を覆へす）<sup>21</sup>

中国では褒姒と妲己を並列することが多いが、『白氏文集』以前の文献には、褒姒を狐と同時に提起することすらなかった。『白氏文集』にある褒姒を狐に類比することが初めてで、このことから、その時代に国を滅ぼす美女を狐に類比する傾向が生じたのではないかと推量される。言い換えると、唐の文学では、国を滅ぼす魔性の美女を狐に喩えるということはひとつのモチーフとして確立した。唐の時代の文学が日本の文学に大きな影響を与えていたため、中国で褒姒の変身譚には何の変化も生じていなかったが、『平家物語』の作者が敏感にこのモチーフを吸収して変身譚を変えた可能性は考えるに値しよう。

#### 5.4 まとめ

以上をまとめると、日本における褒姒を狐とする話の誕生を促した理由は以下の3つである。第1に、『平家物語』が成立した時代の日本において、狐——女性の変身譚が龍やトカゲ——女性の変身譚より受け入れられやすかったと思われる。第2に、時間上、妲己の話がすでに日本に受容されており、そのうえで妲己と褒姒の身分などの面においても共通点があるため、妲己が狐に変身して逃げ去った話は褒姒に流用してしまった可能性がある。第3に、日本文学に多大な影響を与えた中国の唐の文学では、国を滅ぼす美女を狐に喩える傾向が見られるため、『平家物語』の作者もこのようなモチーフを吸収して褒姒の話に転用したと思われる。

#### 6 おわりに

本研究では、中国と日本の古典文献を量的<sup>22</sup>に調査し、両国の褒姒の変身譚を提示した上で比較を行い、褒姒の狐の変身譚が形成した当時の文化背景および日本における中国文学の受容を視野に入れ、日本における褒姒の変身譚の形成について分析を行った。

結論：(1) 褒姒の変身譚は中国において、非常に早い時期にある程度定着し、その後も変わりがなく伝承され続けてきた。狐の変身譚が広く流布した唐の時代でさえ、褒姒

<sup>21</sup> 訓読文は鈴木（1928）、pp.264-266を参照。

<sup>22</sup> データベースを用いて中国古典文献計1,580部、日本古典文献計1,000部以上の作品を調査した。

の龍、トカゲの変身譚が維持されていた。その理由として、以下の2点が挙げられる。a. 文献の性質に制約されたこと。b. 龍、トカゲの変身譚が定着した知識として共有されたこと。

(2) 日本において、褒姒を龍、トカゲとする話が受容されておらず、独自で褒姒を狐とする話を創り出した。その理由として、主に以下3点推測できた。①13世紀の日本の文化背景のもとで、龍、トカゲが女性に変身する話より、狐の変身譚が受け入れられやすかった。②妲己の話を褒姒に流用した可能性がある。③中国唐の文学のモチーフを日本に受容された。

今後の課題として、褒姒の狐とする話その後日本生まれの玉藻前物語に入り込み、玉藻前の生前譚となった段階についてさらに分析したい。また、日本の文献を調査する際に、データベースを利用したが、褒姒に関する記述が8件しかなく、新しい文献を発見し次第増やしたいと考える。

#### 参考文献：

- 河野貴美子『日本靈異記と中国の伝承』勉誠社、1997年。
- 中塚亮「妲己と狐—『封神演義』に見る、イメージ及び物語の成立に至る一過程—」、『金沢大学中国語学中国文学教室紀要・第3輯』、金沢大学文学部中国語学中国文学講座編、1999年、pp.65-95。
- 中村禎里『日本人の動物観』海鳴社、1984年。
- 堀誠「狐変妲己考」『早稲田大学教育学部学術研究国語・国文学編(36)』、早稲田大学教育学部、1987年、pp.103-113。
- 「『三国悪狐伝』と玉藻前説話の変容」、『近世文学と漢文学』、汲古書院、1988年、pp.169-190。
- 「狐変妲己考補」『早稲田大学教育学部学術研究国語・国文学編(39)』、早稲田大学教育学部、1990年、pp.127-135
- 吉野裕子『狐：陰陽五行と稻荷信仰』法政大学出版社、1980年。
- 周作人訳『平家物語』中国对外翻訳出版公司、2001年。
- 楊允・許志剛「“赫赫宗周，褒姒灭之”——“女色祸国”论及其文学表现探析」『社会科学輯刊』、2008年、pp.27-30。
- 馮立鰲「褒姒的命運」『国学』、2009年01期、pp.45-47。

#### 引用文献：

- 荒城孝臣著『列女伝』明德出版社、1969年。

- 大江匡房著、大曾根章介校注「狐媚記」『古代政治社会思想』岩波書店、1979年。
- 大野峻著『国語』明德出版社、1969年。
- 大橋新太郎編『日本文学全書』第二十編『平家物語』博文館、1891年。
- 鈴木虎雄『白楽天詩解』弘文堂書房、1928年。
- 野口定男訳『史記』平凡社、1968年-1971年。
- (漢) 司馬遷撰 (宋) 裴駰集解 (唐) 司馬貞索隱 (唐) 張守節正義『史記』中華書局、1959年。
- 劉向撰『晏子春秋・古列女傳』臺灣商務印書館、1965年。
- (漢) 班固撰 (唐) 顏師古注『漢書』中華書局、1962年。
- 王允撰『論衡』上海古籍出版社、1990年。
- 梁元帝撰『金樓子』藝文印書館、1966年。
- 阮元撰 孔穎達正義『毛詩正義』中華書局、1957年。
- 李昉撰『太平御覽』中文出版社、1968年。
- (宋) 蘇洵著 曾棗莊 金成禮箋注『嘉祐集箋注』上海古籍出版社、1993年。
- (清) 嚴可均校輯『全上古三代秦漢三国六朝文』中文出版社、1981年。
- (明) 馮夢龍編 陸樹勳 竺少華標点『新列国志』上海古籍出版社、1981年。